

大正六年八月一日發行

婦人子ども

第十七卷
第八號

フ
レ
ー
ベ
ル
會

第十七卷第八號目次

本邦幼稚園の發生時代……………小西 信八	體格検査の問題……………菅原 敏造
三市聯合保育會提出遊戲及歌曲(二)……………	大坂市保育會……………
幼稚園教育の科學的研究の前途……………	紹介子……………
兒童樂園を訪ふの記……………記 者	

本誌定價

一冊 郵税共金拾參錢 六冊前金郵税共七拾貳錢
拾二冊同金壹圓四拾四錢 郵券代用 一割増

購讀申込

本誌購讀御希望の方は右定價表により振替貯金にて御拂ひ込み下さい。直に送本致します。(振替口座東京一七二六六番)

本會宛御用務

本會宛諸般の御用務は左の如く願ひます

庶務及會計に關する御用務は東京女子高等師範學校附屬幼稚園内フレーベル會事務所宛

本誌編輯の御用務(寄稿、廣告等)は東京府下代々木山谷一二四倉橋惣三宛

木山谷一二四倉橋惣三宛

大正六年八月一日印刷 納本

大正六年八月一日發行

編輯兼發行者 倉 橋 惣三

編輯兼發行者 東京市本所區番場町四番地

印刷者 東京市本所區番場町四番地 功

印刷所 凸版印刷株式會社本所分工場

發行所 フレーベル會

東京女子高等師範學校附屬幼稚園内

婦人と子ども

大正六年八月一日
第十七卷第八號

本邦幼稚園の發生時代

小 西 信 八

我が國に創めて設けられた幼稚園は明治九年六月に東京女子高等師範學校（現今）の附屬として設立せられた幼稚園である。その時の保姆主任は獨逸の婦人で松野クララといふ人であつた。クララ女史は、獨逸へ留學した松野礪氏の夫人である。幼稚園の幹事としては關信藏氏が任に居られた。

現今でも、幼稚園に關する著書は、我國に於ては、非常に尠いのであるが、當時にあつては幼稚園に關する著書は、纔かに二種を數へたに過ぎなかつた、而してそのいづれもが言ふまでもなく翻譯書であつたのである。一つは女子高等師範學校から出版したので「幼稚園記」といふのであつた、これは三冊になつてゐた。米國人ドゥアイ氏の著書を翻譯したもので、譯者は今言つた幹事の關信

藏氏である。この本は大體に於て、理論が主であつたが、譯し方が悪いのか、原著の論旨が徹底してゐないのか、随分と分りにくい本であつた。關信藏氏は亞米利加へも行かれた人で、却て篤學の士であつたが、惜しいことにはその後間もなく世を去られた。

「幼稚園記」と殆んど同じ頃に、文部省から出版されたものに、「幼稚園」といふのがあつた。これも矢張三冊になつてゐた、クリッヂの著書を翻譯したものである、クリッヂといふのは、英國人が獨逸人か私は判然と記憶して居らぬが、兎に角この原書は英文で書かれてゐた、今でも多分女子高等師範の書庫にこの原書は保管されてある筈である。この「幼稚園」を譯したのは桑田耕平といふ人

である。この本はどちらかと言へば、幼稚園の實際に就て多くの事が記されてゐて、大變分りよい本であつた。つまり前の「幼稚園記」とこの「幼稚園」とを併せると、先づ當時に於ては、幼稚園の理論と實際とに通ずることが出来たわけなのである。

「幼稚園」の序は原序をそのまゝに譯さずに、譯者が序文を書いてゐる、しかし大體に於て、その述べてゐる主旨が原序に述べて居るところのものと異らないので、この點がこの著の瑕瑾であるそれから「著ならべ」といふ遊戲の説明に、原著に於て著を並べてABC等の文字を作るやうになつてゐるのに従つて、この譯書には著を並べて片假名を作らせるやうになつてゐる、それだけならば原著の主旨を適用したのであるから差支ないのであるが、この譯書には假名を一通り習はした後に尙漢字を「著ならべ」によつて習はしめやうと企てゝあるのである、これなどは、幼稚園教育の主旨が徹底してゐなかつた創始時代とはいへ、可なり

無考へな試みであつたと思ふのである。乍併這麼缺點は擧げるものゝ、この兩著は兎に角、我が國幼稚園の發生時代に於て、大いに重要な役目を果たしたのである。

その後、明治十一年六月に至つて、東京女子高等師範學校に保姆練習科といふものが設けられた而して、この時募つた生徒達が十三年の七月に卒業することになつた、その時の卒業生は十一人であつた。それは原田良、大澤嘉次、勝山貞、長竹國、武藤八千、山田千代、前原鐵、松本桂、福田布久、小林利、相原春の諸氏である。

私は是等の人々が卒業された後に、附屬幼稚園の幹事に就任したのである。この第一回の卒業生の中で、武藤八千、山田千代の兩氏は本校の附屬幼稚園に就職せられた、この第一回の卒業生の方々の中には大阪とか仙臺とか九州とかの各地に赴任せられて、その土地の幼稚園の草分けとなつたといふやうな人が多いのであるが、今一寸誰が何

處へ行つたか思ひ出せないのは遺憾である、たゞ一つ私の覚えてゐるのは長竹國氏が大阪へ行かれたことである、それは當時大阪の府會議員をして居られた豊田文三郎氏から、大阪へ幼稚園を拵へたいと思ふが、誰が適當な人を周旋してくれと、私の許へ申し越されたので、私は長竹氏を推したのである。乃で長竹氏は大阪へ行つて愛珠幼稚園を開かれた、而して非常に良好な成績を示されたそれがために大阪にはその後間もなく八つばかりの幼稚園が出来る位に保育事業が盛んになつた、東京にはその頃、附屬幼稚園の外にはまだ一つも幼稚園は増えてはゐなかつたのである、故にその頃大阪に如何に幼稚園熱が高まつたかを知り得るのである。

附屬幼稚園の幹事は關信藏氏が歿せられた後、神澤專三郎氏が任に就かれた、神澤氏は伊澤修二氏と共に文部省留學生として洋行をされた人である。神澤氏も今は既に世に亡き人である。神澤氏

の後を襲うて幹事の任に就いたのが私である。

その頃、幼稚園では、フレーベルの二十恩物の名を漢語に譯して用ゐてゐたので、大變六ヶ敷く子供には不向きであつた。私はこの漢語を和語に改めて、呼び易く、子供の耳に六ヶ敷く響かないやうな名稱に改めた、例へば原色三つと間色三つとの色糸でからげた球を六球と稱したのであるがこれは「むつのたま」と改めた、刺繡は「ぬひとり」摺紙は「かみたゝみ」、織紙は「かみをり」、剪紙は「かみきり」、刺紙は「かみさし」といふやうに、それ〴〵改稱した。又三體即ち圓體、立體、長方體をも「まる」「しかく」「さしがた」といふやうに平易に呼び替へた。

保姆練習科は明治十三年七月に至つて一時廢止せられ、幼兒保育法は之を本校の課程に編入することゝなつた。

附屬幼稚園では初の頃は、宮内省から伶人が來て笏を打ち、琴を奏でながら、萬葉集や古今集の

歌を、幼児に唱つて聞かせてゐた。間延びのした眠いやうな節まわしで、意味の分らないことを唸られるので、幼児は自分達とは没交渉の音楽を退窟を凌いで、聞いてゐなければならなかつた。言ふまでもなく、幼児に取つては甚だ迷惑な音楽であつたのである。

乍併幼児は間もなく、この難儀な音楽から救はれるやうになつた。それは加藤きん氏が外國の唱歌から幼稚園に向きさうなものを選んで、翻譯し唱ふことの出来るやうに調子をとゝのへてくれたのである、而してこの唱歌を當時音樂學校の教師をしてゐた北米合衆國人ルーサル・ホワイチング、メーンン氏がヴァイオリンに合はせて幼児に教へてくれるやうになつたのである。これで幼児は生々として來た、始めて愉快に遊ぶことが出来るやうになつた。古代語で幼児には縁の無いやうな思想感情を現した俗人の唱歌の後に、「蝶々、蝶々、菜の葉にとまれ」といふやうな、幼児に分り易い

唱歌を教へられることになつたので、幼児が喜んだのは無理もないことである。加藤きん氏は竹橋女學校の第一回の優等卒業生で、その後洋行したこともあり、謙遜な、善い人であつた。

メーンン氏は日本語が出来なかつたので岡倉覺三氏及び後、高嶺秀夫氏の夫人となられたる中村女史が常に通辯の勞を取つて居られた。メーンン氏はその頃、年齢は承知しないが、何でも六十に近かつたと思ふが幼児に非常に慕はれた、メーンン氏も幼稚園へ來るのを非常に喜ばれて、いのちが二十年も延びたと常に言ひ言ひして居られた。

メーンン氏は音樂學校の伊澤校長と性向が合はなかつたと見えて、常に不平に堪えぬげであつた。それで通辯をして居られた岡倉、中村の兩氏はメーンン氏の不機嫌の時は、自烈^{じれつ}られるので、閉口して居られた。しかし幼稚園へ來るとメーンン氏の機嫌はすつかり癒つて了つた、而して幼児のためにさも愉快さうにヴァイオリンを弾いて時の

移るのも忘れてゐるやうであつた、幼児もメー
ン氏の來るのを待つてゐて、メーソン氏が來ると
ズボンにつかまつたり、手にぶらさがつたりした
ものである。するともうメーソン氏はニコ／＼、
可愛くて堪らぬといふやうな顔をされるのであつ
た。這麼具合で幼稚園のためにも、メーソン氏の
ためにも、誠に都合がよかつたのである。メーソ
ン氏は後、郷里亞米利加に歸つて亡くなられた。

明治十六年頃であつたかと思ふ、今のお茶の水
の幼稚園の門と往還を隔て、向ひ合つたところ
に私立の小林小學校といふのがあつた、これは小
林道清といふ人が經營してゐたのである。幼稚園
はその頃毎日午後の三時に授業を終つたので、幼
兒の中には、幼稚園のかへりに、直ぐこの小林小
學校へ行つて本を習ふものがあつた。是等の幼児
の中には文部次官の辻新次氏の令息や普通學務局
にゐた吉村寅太郎氏の令息などもまぎつてゐた。
すると或日のこと、小林小學校の校主である小林

氏が私のところへ來られて、次のやうなことをい
はれた。近頃あなたの幼稚園の生徒がかへりがけ
に私の學校へ來て、本を習つて行くがこれは何う
いふものであらうか、單に自分の收入の上から言
ふと、一人でも生徒の多い方が望ましいのである
が、幼稚園の生徒が本を習ひに來ることはあまり
よろしいことではないと思ふ、幼稚園の生徒はも
う幼稚園で彼等の頭腦で堪えられるだけの仕事を
して來てゐるのである。それなのに、尙私のところ
へ來て、たとへ二行でも三行でも、本を習ふとい
ふことは、子供にとつては退儀なことである。

それ故私は何うも幼稚園の生徒が私のところへ
來ることを黙つては居られない、それで親御達の
意見をよく聞いてみたいと思ふ、しかし私の口か
らは言ひにくいから、あなたからよく聞いて貰ひ
たい、子供のためにも氣の毒であるし、又私自身
としても收入の多きを望むがために、誰彼の差別
なしに弟子入りを許すと思はれるが殘念であるか

らといふのが、まア大體の主意である。誠に高潔な考であつて、私も小林氏の心の清さに感服したのである。乃で早速文部次官の辻新次氏に會つて小林といふものが斯う申してゐますが、あなたのお考へは何うですかと聞いてみた、すると辻氏も小林氏の高潔に感ぜられたが、子供は幼稚園から三時に歸つて來ると、時間が中途半端ちゅうはんぱんになるので小林のところへやつて置くので、別に何も教へて貰はなくもないので、たゞいゝ加減に時を過ぎさせてさへくれゝばいいのだから、そんなに眞面目に責任を考へてくれなくてもよいのであるといふやうな返事であつた。私は小林氏にこの旨を傳へたこの結果幼兒が小學校へ行くことを止めたか何うか私は今覺えてゐないが、兎に角這麼心持のよい話もあつたのである。

その後明治何年の頃であつたか、附屬小學校の最下級と幼稚園の最上級とを一緒に纏めて了つたことがある。これは、それまで幼稚園と小學校の

仕事が全然異つてゐたので、幼兒をしてこの急變に耐えさせることは面白くないといふ説があつたからである。今でも幼稚園と小學校との連絡問題は種々の方面から重要視せられてゐるのであるがその頃もこの問題に對しては隨分局に當る人々が頭を悩ましたのである。外國にはその頃幼稚園と小學校との間にコンネクション・クラス（連絡級）又はインターミヂエート・クラス（中間級）といふやうなものがあつて、この問題が解決されてゐるといふことであつたが、附屬幼稚園に於ては之を設けることが出来なかつた、といふのは豫算内ですべての計畫を立てゝ行かなければならなかつたからである。乃で私は附屬小學校の主事をしてゐた理學士の鮫島晉氏と相談して、今述べたやうに小學校の一年級と幼稚園の上の級とを一つにして了つたのである、幼稚園と小學校との連絡問題は是で一先づ解決したのである。それがために幼稚園の上の級へ行くと幼兒は片假名を習ひ始めるこ

とになったと同時に小學校の一年生は又「かみたゝみ」や何かをすることになったのである、それ故幼稚園を完全に終つた者は同時に小學校の第一學年をも終つたことになるのである、乃で幼稚園を経ずに、いきなり附屬小學校に入學して來る生徒は一年級に入學せしめたが、幼稚園を卒業して來た者は、之を小學校の二年級に入學せしめたのである。

明治十七八年の頃であつたと思ふ、私は幼稚園の保姆と小學校の訓導とは待遇上權衡が取れてゐないのを遺憾に思つて、これを同一にせんことを文部省に願ひ出でたことがある。これは官制上小學校の訓導は本官であつたが、幼稚園の保姆は雇たるに過ぎなかつたからである。それ故に同じ級で勉強して卒業した人々でありながら、小學校へ行く人は本官となり、幼稚園へ行く人は雇となるといふことになるので、自然幼稚園へいゝ人を呼ぶことが出來ないことになつて了ふのであつた、

而かも同じ卒業生とはいへ、その人の性質によつて小學校へ向く人と幼稚園へ向く人とがあるのであるから、待遇の相違のために、幼稚園保姆として適當な人を小學校の訓導とならしめて了ふやうなことがあつて、誠に遺憾なことが多かつたのである。然るにこの願ひは遂に聽許されなかつた。

その理由は、幼稚園といふものは未だ世界各國に於て善しと認められてゐるのではない、言はいまだ試験中のものである、それであるから保姆を本官とすることは尙早であるといふのである。大體上述の意味を記した長い符箋が附いて、この時の提出願書は却下されて了つたのである。尙この符箋には幼稚園は獨逸では社會主義を鼓吹するものであるといふので禁止せられんとしてゐるなぞと書いてあつた、成程獨逸に於てフレーベルが社會主義を鼓吹するものと誤解せられたことはある、しかしそれは全くの誤解であつて、フレーベルの弟のカール・フレーベルが社會主義者で機關雜誌か

何かを經營してゐたことがある、しかしフレーベルはこれとは何の關係もなかつたのである。獨逸政府でも間もなく、その誤解であることを悟つたのであるが、文部省ではよく調べもせずに直ちにこの誤解のお取次ぎをして了つたのである。私はこの時文部省に出頭して、いろいろ話してみたのであるが遂に許されなかつた。しかし文部省でも、その後氣がついたらしく、さりとて間違つてゐたとも言へぬところから、幼稚園といふものに對しては默許の態度を取つてゐたのである。

明治十七年の頃であつた、私は時の文部大臣大

木喬在氏にお願いして、加藤きん子女史を保育研究のため留學させて貰ふことにした。加藤女史は北米合衆國のボストン附近の女學校へ入學して專心保育を研究されたのである。然るに私は明治二十三年に豐啞學校の方へ轉任したので、加藤女史はその後歸朝せられたが、何ういふ都合であつたか、その研究せられた保育法を以て本校に勤務せられずに、英語の教師か何かをして居られたやうである、而して間もなく世を去られたのであるが我が國の保育事業發達のために惜しいことであつたと思ふ。(文責在記者)

體格検査の問題

菅 原 教 造

一 春秋二季の大掃除の様な體格検査

今は幼稚園でも學校——小學校、中等學校、專門學校、大學と云ふ風に、凡そ學校と云ふ有ゆる學校でも體格検査（正しく云へば體質測定）を爲ない所はありません。しかしされる方は尙更の事でしようが、する方にしましても意識的には格別に其意味を考へて居ないやうです。例年のお極りだから、厄介だけれどもまた遣るとしようか位の所で、春秋二季の大掃除のやうな具合に、厭や厭やながらそれが通つて行つて居るやうです。たまた／＼父兄が教育家やお醫者さんの場合には、或は昨年のと比べたり、三島さんの平均數との差引を調べて見たりします。かう云ふ人達にしまして、高々それだけの事です。それ以外にそれ以上に、かう云ふ検査の有する意義と云ふやうな事を、餘

り氣を付けては居ないやうです。

二 いろいろの問題

しかし何事によらず考へ出しますと事が意外に面倒になつて來るものです。此の體格検査（體質測定）にしまして同じ事です。例へば、私達は何故に検査……検査ではなく實は測定です……測定に測定があれ丈けで充分なのであらうか、或は更に測定すべきもつと重大な點が有るのではないかと云ふ事を考へます。これには人類測定學の箇條を參考して見なければなりません。又私達は何故に下の學校から上の學校へ此の體質測定を接續させずにあるのだらうか、幼稚園から大學や專門學校まで一人の子供の發達と成長を通覧し得るやうな組織を何故に作らずにあるのか知らと云ふやうな事を尋ねたくなります。又私達はあゝ云ふ測定

は體質改良・學校衛生と云ふやうな小局部の考の外に、もつと大きい一國の民族と人種とかの本質や發達の上から見た重大な意義がありはしないかと云ふ事をも考へます。それから私達は體質測定の起源は元來どんな事件に發したのであらうか、かう云ふ測定と云ふものの本來の意義は何處に在つてそれがどう云ふ風に變化して來たのであるかと云ふやうな事も頭に浮んで來ます。更に私達は此の體質測定の兄弟分たる刑事人類學の方の指紋法とかベルティヨン式測定とか云ふものに比して、此の學校の體質測定の實際上の意義と云ふものをも尋ねて見たくなります。そして最後に私達は此の體質測定の問題は、餘り大局を見通す事の出來ない、又全的民族生活と云ふものに餘り興味を持たない小局部の専門家たる學校醫に委せたりした爲めに、案外其主義なり眞髓なりが化石して來かゝつて居るのではないかと云ふ事を感じたりします。

三 測定者の化石

化石々と云つても、一概にけなす事が出來ませんまい。寧ろ問題の性質上化石するのが當然であるならばそれは自然の勢と云ふもので、其儘に放つて置いて宜しいものかも知れません。しかし物には歴史と云ふものがあります。由來があります、起源と云ふ事があります。

今は化石し切つて了つて、測定をする人も平凡な義務として器械的にやつて居りますけれども、やり始めの昔は非常に興味のある意義のある事實として感激的な態度を以て或は沸々と血を湧かしたり、電氣の火花の散るやうに神經を激動させて居た事があつたかも知れません。

従つて國際間の大論戰も起つたでしょう。民間に凄まじい恐怖をも起させたでしょう。其處に生きゝした人間味と云ふものが動いて居たのでしょう。化石とは丸で違つたものが働いて居たのでしょう。

四 英國は測定の源流

人體測定の元祖は英國のホワイト（一七二八—一八一三）と云ふ人です。此の人は歐洲人と黒人と類人猿の前腕の長さを比較しました。ホワイトは前腕の長さは黒人は歐人よりも長く類人猿は更く黒人よりも長いと云ふ事を發見しました。ホワイトは當時黒人を五十人も測定したのでありまして、其記録は一七九七年（寛政十一年）に出版されて居ります。此の前腕と二の腕の長さの比較はかなり興味のあるもので、カンニングハムによれば次のような百分比になります。

「二の腕」の長さを……………一〇〇、〇とすれば

チンパンジー……………九四、〇	類人猿未開人……………八一、九
ファイジー人……………七七、七	類人猿未開人と歐洲人との比較……………七七、七
歐洲人（成人）……………七三、四	胎兒との比較……………七三、四
同（胎兒六ヶ月）……………七七、〇	
同（胎兒二月半）……………九〇、〇	

前腕

次に一八三四年（天保五年）にヴィエルメと云ふ人が英國人の種々の階級の人を、例へば工業地

や大都市の住民を田舎の人と比較したり、炭山に働いて居る子供の身長や健康を調査したりしました。この人は今の伊太利のニツェフォロ（無産者人類の著者）などの先驅者です。

又一八六一年（文久元年）にはベッドと云ふ人が愛蘭土人の頭髮の色と眼の色の研究を發表し續いて此の調査を全大英國に及ぼし、遂に大陸にまで其研究の歩を進めました。

五 普佛戦争——巴里攻撃——砲彈

博物館に墜つ

歐洲大陸では殊に此の調査が盛になりましたがこれに就て非常に興味のある政治上の因縁談があります。

一八七〇年（明治三年）の七月に普佛戦争が起りましたが、既に九月一日にはナポレオン三世がセダンで降参をし、九月十六日には巴里が圍まれて了ひました。巴里は翌年（一八七一年、明治四年）の一月二十八日に陷落し、此の日に普魯西王

ヴィルヘルム一世はヴェルサイエ宮に於て獨逸皇帝の位に即いたのですが、此の包圍の間の巴里の人々は、一方ならぬ辛酸を味ひました。

ビスマルクが「どうも意志の無い奴ぢやから、行くなと云うて聞せとつても、何處へ飛んで行きよるか分らんで、はゝゝゝどうも困つた奴で……」と佛軍の抗議を嘲笑したと云ふ有名な普軍の砲彈は、遠慮なく病院へも學校へも飛んで來ました。

殊に此の砲彈は度々有名な博物館に墜ちて損害を與へました。これが抑々事件の發端なのです。當時の館長は一流の動物學者人類學者として、殊に頑固を以て聞えたド・カートルファージュでありました。

六 老人類學者の激怒

人種の上からも歴史の上からも、もと／＼仲の悪い佛蘭西と獨逸です。それが一たまりもなく戦争には負ける、巴里は圍まれる、慘酷な砲撃を受

ける。殊に自分の主宰して居る美しい博物學の博物館に憎むべき普魯西の砲彈が來るのですから、六十の坂を越した一徹者のド・カートルファージュが怒つのも無理はありません。此の老人は普魯西人に對する憎惡が其極點に達しまして、眞に怒が心頭より發したのであります。

彼はラティン人種として怒り、佛蘭西國民として怒り、人類學者として怒りました。就中此の人類學者として怒つたと云ふ事が、佛獨の二大人類學者を中心にして、世界の學界を賑はした大事件を生ずるに至つたのであります。其の事件とは則ち普魯西人種問題であります。

七 普魯西人種問題

ド・カートルファージュは其一七八一年に、憎惡と憤怒の結晶とも云ふべき一論文を草しまして、先づ之を『兩世界評論』に掲げ、次に『人類學會々報』にも掲げ、尙單行本として出版しました。その論文は『普魯西人種』と題した有名なるもので、

これは先づ和蘭文に譯され、次に一八七二年には英譯されまして『人種學的に考へたる普魯西人種』と云ふ名で出版されました。

此の有名な論文は、人種學の上から非常に激越した調子を以て普魯西人を攻撃したものであります。ド・カートルファージュの云ふには——普魯西人種は元來テュートン人種ではない、彼等は嘗て歐洲へ侵入した蒙古人の後裔のフィン人で、今のラップ人などと同族である。彼等は自分の受ける事の出来ない文明を嫌つて且つ之を呪ふ野蠻人である。彼等がわざ／＼吾が博物館を砲撃した所以は即ち、野蠻人の本性を露はしたもので、其目的は巴里から優秀と善美とを奪はんが爲めである——と云ふ風なもので、實は佛蘭西人としての怒が、人類學者としての血を湧かせ過ぎたのであります。

八 挑戰と應戰

此の思ひがけない激論に對して、負けず嫌ひで研究好きの獨逸人はどうして黙つて居られましょ

う。ド・カートルファージュに劣らないほど頑固で且つ勢力のあつた獨逸の醫者にして政治家と人類學者を兼ねたヴィルヒョウは、年配も五十の働き盛りでした。彼はテュートン人として獨逸人として且つ人類學者として此の挑戰に應じまして、此の二大家の間に烈しい人類學の戦ひが始まりました。ヴィルヒョウは一八七二年（明治五年）に『科學的人類學の方法を論じてド・カートルファージュ氏に答ふ』と云ふ論文を『人種學雜誌』に公けにし（これは佛譯されて一八七三年『科學評論』に載りました）、更に『普魯西人種に就て』と云ふ論文を『人類學雜誌』に書きました。

此の二人の大家の論戰には、普佛戰爭と云ふ大事件が生んだ國民的の憤慨や嫌惡が絡み付いて居る爲めに、今日のやうな世界大戰争時代から見ても一層の面白味があります。

九 論より證據

當時餘り進んで居なかつた人種學上の知識は、

強烈な國民的憤激に由つて尙更調子を狂はせられて居りました。實際を申しますと、猛り立つた二人の學者の議論は共に半分は正しく半分は誤つて居たのでありました。ド・カートルファージュの正しかつたのは普魯西人とフィン人とは同族であると云つた事で、實際フィン人はリトアニア人やテュートン人と同族である事は現在に於て認められて居るやうであります（リブレール）。ヴィルヒョウの正しかつたのはラップ人とテュートン人とは同族でないと言つた事で、實際ラップ人とフィン人とは當時は混同されて居たのでありました。即ち普魯西人をテュートン人種に屬せないと云つたのはド・カートルファージュの誤りで、普魯西人はフィン人と同族でないと言つたのはヴィルヒョウの誤りでありました。

但しこれは其後の研究者が與へた判決で、當時の二人の議論と云ふものは云はゞ水掛論の傾きがありました。それ故互に自分の説を押し通さうと

する爲めには、何か證據を擧げなければならぬのでありました。そして其證據を擧げる爲めに採つた獨逸政府の努力は、間接に學校の體質測定を生んだと云ふ不思議な廻り合せに成つて來たのであります。これから順に其手續を述べましょう。

十 獨逸政府の國勢調査——小學校生

徒六百萬人の測定

蒙古人の後裔だのフィン人やラップ人と同族だのと云はれて怒り出した普魯西人は、何とかして之を科學的に反駁してやりたいものだと思つて之を人物としては醫者として人類學者として政治家として勢力のあつたヴィルヒョウがあり、國家として及び民族としては、何百年來の素志を貫徹して統一された獨逸帝國があります。獨逸に取ては實に國運隆々として天に冲せんばかりの勢の漲つた時でありました。思ひ付いた事で出來ない事はないと云ふ意氣込みの盛んな時代でありました。殊に問題が聯邦の主腦部を形作る普魯西人の自負心の

上に懸つて居るのです……

茲に於て獨逸政府は一八七六年（明治九年）に國勢調査^{センサス}を始めまして、獨逸帝國內の小學校生徒六百萬人の頭髮の色と眼の色とを調査しました。これが所謂學校に於ける體質測定の起源なであります。

私共はゲイル^{ヒョウ}や統計官や小學校の校長が、否獨逸民族が、如何に熱心に此の事業に取り掛つたかを、かなり明瞭に思ひ浮べる事が出來ます。彼等は決して化石した測定者ではなかつたのであります。

茲で一寸斷つて置きますが、小學校で生徒の衛生狀態に氣を付けるやうにと云ふ法令の出たのは佛蘭西のルイ・フィリップ王の時代で、一八三三年（天保四年）の法律と、一八三七年（天保八年）の勅令とが最も古いものに成つて居ります。しかし大數の測定を始めたのは全く「普魯西人種問題」に起因した獨逸政府の國勢調査の結果です。

十一 子さらひの恐怖

所が茲に全く思ひがけない餘波の事件が起つて來て、少なからず當局者を困らせました。丁度日本でも徵兵令が施れた時に、若い者を引張つて行つて生血をしばらく取ると云つて農民が一揆を起したと云ふやうに、此の小學校生徒の體質測定は北獨逸殊にボーゼンの民心に絶大なる動搖を與へました。

其時にそれからそれへと擴つた噂は次のやうなものでありました。曰く、普魯西王が土耳其の皇帝^{カイザー}と博奕をして、四萬人の頭髮がブロンドで眼の青い子供を賭けたが、負けたさうだ。それで其四萬人の子供は方々で捕へられて、近々土耳其へ連れて行かれるさうだ。曰く、頭髮の黒い眼の青い加持力教の子供は、皆な田舎から露西亞へ連れて行かれるさうだ。曰く、ムール人が覆を掛けた馬車に乗つて田舎を廻つて、頻りに子供を集めて居るさうだ。曰く、小學校の校長も此の子供狩りの

加勢をして居るさうで、彼等は子供一人について五弗^{ドル}づゝ貰つて居るさうだ――

噂は更に又噂を生みまして果てしがありませんでした。一般の不安はつのもるばかりで、父兄の激昂は極點に達しました。父兄は子供をどしどし退學させて、自宅へ隠して置くやうになりました。若し子供が町へでも出やうものなら、おどろして彼方^{あつち}見^み此方^{こち}見^みをして、すぐ両親にしがみ付くと云ふ始末でした。

小學校の校長も流石に之れには弱つて「な―に浚つて行く子供は、毛の青い眼の緑な子供ですよ。皆さんの子供衆は大丈夫く、私が保證する。決して恐がるには及びませんよ」と云つて廻つて、やつと父兄を安心させたと云ふ珍談があります。

十二 日本人の體質測定

話が「子浚ひ」の餘興まで進みましたから、もうかれこれ御仕舞ひです。何事も人が土臺で制度は後に出来るものです。所が一旦其制度が出来て

了ひますと、後から此の内へ入つて來た人は、よほど偉くないと必ず制度の弊に擒はれて負けて了ひます。つまり目的といふものが追々にぼけて行くからです。ばかしくに成つて行くからです。況や其目的が初めから不完全で、しかも之を扱ふ人が化石して來るとしたならば、これほど變な事はありますまい。

若し學校の體質測定の意義の一部に、日本民族として日本人種としての特徴なり本質なり、又其の發達なり成長なりの標準的研究に貢獻する所があるやうにと云ふ箇條が必要だと、誰か考へたなら、決して現在のやうなものを拵へなかつたでしょうと思ひます。これは御互の問題です。皆さんで一つ考へて下さい。

そこで恐らくは皆さんは今更のやうに、「日本人の體質測定は何時誰が始めて今どう成つて居るのかしら」と云ふ質問を起すでしょう。ついでにすら申しますが、此の方面の開拓者もやはり獨逸人

でした。明治十七年頃の『獨逸の東亞自然及び人種研究會報告』に掲げたベルツの『日本人の體質』と云ふ二つの論文が吾々日本人の「骨格」と「生體」の測定と觀察を試みた最初のものでありました。しかしこれはベルツが大學病院へ來た患者に就て調べたもので、數も五六十人に過ぎず、男女の性別も確かでなく、且つ其人種學上の結論も今から見ると異論があります。

然るに其後三十餘年を経ても、未だ日本人としての何等の大仕掛な測定的研究が發表されて居りません。これは一體どう云ふ譯でしょうか。或はそれは人が無いからだと云ふ人があるかも知れませんが、決して其様な事はありません。

現に東京の理科大學には松村瞭君あきがあり仙臺の醫科大學には長谷部言人君ことひとがありまして、此の方面に精しい深い研究を續けて居ります。殊に松村君の研究は殆ど完成の域にまで達して、しかも尙滿を持して居られるやうですが、これまでに仕終

はせるには、非常な個人的の努力と不便とに堪へなければならなかつたのです。

つまり人はあつても勢と云ふものに乘じなければ大きい仕事は出来ません、出来ても非常に時が後れます。かう云ふ事業の原動力たるべき我民族的精神と云ふものの足だまりが確りして居ないと云ふ事、かう云ふ力強い精神を具體した有力な機關が出来て居ないと云ふ事、たとひ外形的に機關が出来て居ても實力（實現化可能性）が充實して居ないと云ふ事、これが此の方面の研究に於て我國の最大缺點です。

十三 將來の問題

幸に日本人種の體質測定——其人種上の分類、其國別、及び周圍の民族との關係等は、松村君に由て仕上げられつゝありますが、更に重大なのは日本人の發達及び成長の測定の問題です。此の最良のしかも唯一の場所は、云ふまでもなく幼稚園と學校とです。勿論發達及び成長の一系列の大數の

測定を得るまでには、十數年を要すべき氣長な仕事で、しかも頗る煩瑣な手續を要するのではあります。角にも吾々は日本人として之をやり通さなければならぬと思ひます。

やり通す爲めには先づ幼稚園や小學校の體質測定と云ふものに、

此の目的に合ふやうな改正を加へなければなりません。其爲めには今迄のやうに餘り専門的の學校

醫にばかり委せず、大局を見渡す事の出来る人類學者に依頼して測定の大綱を定めて貰はなければならぬ。

成る程かう云ふ事業の着手には、先づ民族的精神と云ふもの燃え立つ足だまりが必要で。然るに今は日本は天下太平なのでし

ようから、何處の隅にも、どんな會合にも、ヴィルヒウが人類學者として憤怒したやうな、又獨逸政

No. of Field

Name		Occupation		Residence of Patient	
Sex	Age	Rel.		Discipline of Worker	
Residence			Place of Observation		
Birthplace			Date		
			Observer		

Measurements		Descriptive Characters			
Head, length		Cos	sin	medium	acute
Head, breadth		Muscle	trachea	coarse	velvety
Vertex to Tragus		Skin colour	Carbonaceous		ana
Strygomatic		Tria			
Nasion to Chin		Urb	1 J 3 3 鼻		
External Occipital					
Internal Occipital					
Nose, length					
Nose, breadth					
Ear, length					
Ear, triviale					
Shin					
External nostril					
Public border					
Acromion					
Elbow					
Wrist					
Middle Finger					
Elbow type					
Over tracheator					
Elbow					
Elbow					
Metacarpal breadth					
Radial crest breadth					
Span					
Circumference of Bristle					
Hand, length					
Hand, breadth					
Foot, length					
Foot, breadth					
Sitting height					

Artificial Deformation	
Painting	Ear
Tattooing	Ear
Circumcision	Nose
Food	Lip
	Tooth
	Finger
	Foot
	Genitals

府が國勢調査を斷行したやうな民族的感激と云ふやうなものが無いかも知れません。しかし何も「感激」や「はづみ」が無ければ仕事が持上がらないと云ふ理窟はありません。よく落付いてねち／＼と理性の働きで切り盛りして行つても……いや寧ろ此の方が却つて初めに見込んだ通りの地味な結果が擧がるでしょう。私は結果さへ擧がればそれで満足です。

いろ／＼と思ふ事を述べましたが、最後に御參考までに人類測定學の箇條書きの見本を一寸御目にかけてましょか。

前頁に掲げたのは大正五年に松村君と長谷部君と柴田君とで我が南洋の新領土の住民を調査に行つた時、松村長谷部兩君が合議して立案した測定表です。今茲で一々此の表の細目を解説するのも面倒ですから略しますが、兎も角も新領土の住民調査といふ世界の戦局の上に起つた目の前の活きた事實を取扱ふ爲めに、當時のオーソリティーが思

ふ通りに作つたものと云ふ所に、學術上の權威の外に尙民族精神的の強い共鳴があり、民族生活の記念的价值があるではありませんか。(六、七、廿三)

入 門 の 書

人類測定學に就いて、初學者にも専門家にも參考になるものは Tanson and Read, *Notes and Queries in Anthropology*. 1892. と云ふ便利な本です。

人類學・人種學・考古學等各部門の全般を、最も簡明に知るには、Haddon, *History of Anthropology*. 1910. が宜しうでしょう。小冊子ですが、非常によく纏めてあります。

人類學の大體を平易に述べた輕便な本も、やはり Haddon, *Races of Man and their Distribution*. 1909. でしょう。少し精しい所では、Dunikier, *The Races of Man*. 1900. が有名です。

尙以上の諸書にはそれ／＼専門の參考書を擧げてあります。それから「普魯西人種問題」に就ては、Ripley, *The Races of Europe*. 1900. なを御覽なれう——

狩



第一十四回
京阪神三市聯合

保育會提出遊戲及歌曲



大阪市保育會

兔
狩

一、これからお山に兎狩、皆様用意はよろしいか

遠くにお網をはりまして、しつかり追ひませう油斷なく

ホ、ホ、ホ、ホ、ホ、ホ、ホ、ホ、ホ、ホ

二、兎のお目々はよく見える、長いお耳で音をきく

後脚長うてよくはねる、しつかり追ひませう油斷なく

ホ、ホ、ホ、ホ、ホ、ホ、ホ、ホ、ホ、ホ

今日はどうも、いい天気、高いお山や深い谷

あちらやこちらを飛びませう、楽しくおどつて遊びませう

ラ、ラ、ラ、ラ、ラ、ラ、ラ、ラ、ラ、ラ、ラ

四、オヤ／＼どこかで人の聲、早くお家へ歸りませう

あれ／＼兎が飛んでゐる、追へや追へ／＼ホ、ホ、ホ、

示、示、示、示、示、示、示、示、示、示、示、示

五、獲物が澤山ありました、お父様やお母様のお土産に

お家へ持つて歸りませう、うれしいくうれしいな

ラ、、、ラ、、、ラララ、ラ、、、、ラ、、、、ラララ

鬼狩り遊戯

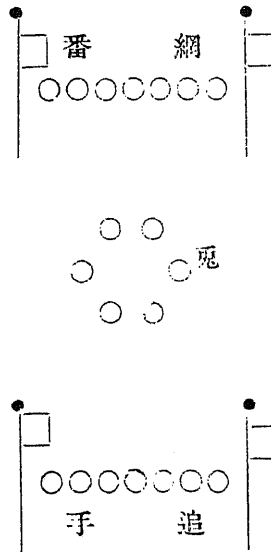
準備 一列に兔組、網組、追手組と順序に整列す

兔組 各兒耳を付けたる鉢巻をなし兔に擬す

網番組 襟をなす 追手組 運動帽を冠る

運動 前奏中場内を一週す

第一歌詞 兔は中央に圓列を作り網。追手は所定の場所に列を作る



第二歌詞 網番組追手のみ動作をなし兔は踞して拍手す

兔のお目はよく見える (兩手の指頭にて圓を作り眼に寄す)

ながいお耳で音をきく (兩手を側方より舉げ長き耳の格好をなす)

後足ながくて(兩手を腰にとり右足を一步後に退く)よくはねる(一回跳躍す)しつかり追ひま
せう油斷なく

ホホ、ホホ、ホホ、ホホ

ホ、ホ、ホ、ホ、ホ、ホ、ホ、ホ (拍手し後直ちに踞す此と同時に兔直立)

第三歌詞 兎組のみ動作をなす

今日は嬉しや良い天氣

高いお山や

深い谷

あちらやこちらをとび廻り

たのしうおどつてあそびませう

ララ、、、、ララ、、、、ラララ

ララ、、、、ララ、、、、ラララ

第四歌詞 兎及び追手のみ動作をなす

おや／＼何處かで人の聲

早くお内へ歸りませう

あれ／＼兎がとんでゐる

追へや追へ／＼ホホホホホ

ホホ、、、、ホホ、、、、ホホホ

ホホ、、、、ホホ、、、、ホホホ

第五歌詞

獲物は澤山ありました

お父さんやお母さんのお土産に

おうちへ持つて歸りませう

うれしい／＼うれしいな

ララ、、、、ララ、、、、ラララ

(圓列のまゝ行進す)

(上肢を上に舉げ山形をなす)

(踞して前方に手を伸す)

(圓列の儘スキップをなす)

(舉手跳躍)

(耳に手を翳し音を聞く態度をなす)

(任意の場所を摺歩にて廻る)

(兎は同じく摺歩す)

(追手は指して今や追ふべき態度をなす)

(兎は同じ動作、追手は拍手をなす)

(兎は任意に逃れ追手は追ふ捕へられたる時網番の前に件れ行き追手と網番と手を繋ぎて兎を乗せる用意をなす)

(追手と網番と繋ぎて兎を乗せ)

(追手の舊位置にまで伴れ行く)

(全部拍手す)

猫と鼠遊戯

(ト調四拍子) 猫とねずみ

1 5 1 3 | 1 - 5 - | 1 - 5 - | 1 - 5 - | 1 5 1 3 |

1 ネズミカ データー データー データー ネズミカ

2 ----- さがす さがす さがす -----

3 ----- かちる かちる かちる -----

4 大キナ猫カ データー データー データー 大キナ猫カ

1 - 5 - | 6 6 7 7 | 1 - 0 ||

1 データー ダイドコロ ニ

2 さがす -----

3 かちる -----

4 データー -----

猫とねずみ

一、鼠が出たくく

鼠が出たく臺所に

二、鼠がさがすくく

鼠がさがすく臺所に

三、鼠がかちるくく

鼠がかちるく臺所に

四、大きな猫が出たくく

大きな猫が出たく臺所に

(一) 一列の圓形を作り鼠五六人と鈴をつけたる猫一人と圓内に入り鼠は圓の一方に横列を作り猫と向ひ合ひて禮をなす、(二) 次に猫のみ圓形の外に出づ、(三) 第一の歌の間鼠は横に一列にならび上體を屈めつゝ圓形の中程まで進み最後に屈む、(四) 第二の歌の間兩手を膝の上に乗せ物をさがす眞似をなす(頭を左右に動かして)、(五) 第三の歌の間兩手を口の邊に持ちゆき物をかちる眞似をなす、(六) 第四の歌の時縱に一列となり猫をさけつゝ上體を少しく屈して圓内を歩む此間猫は鼠に近づかんと圓外を靜かに歩む、(七) 歌終れば猫は圓内に入りて鼠を描ふ、(八) 描へられたる鼠は猫より鈴を受取りて此時双方禮をなす次の猫となる、(九) 再び双方禮をなし鼠は圓形内の者の前に至り双方禮をなして交代す

鳩

鳩 鳩さんよ

巢を出で、お出でなさい

お米をやるから皆食べよ

食べても直ぐに歸らずに

あちらやこちらを飛びまはれ

私も一緒にとびませう

鳩

(へ調二拍子)

6	0	5	0	65	31	2	0	3	13	5	5	66	66	5	0
ハ	ト			ハ	ト	サン	ヨ	ス	タイ	デ	テ	ガイ	デ	ナ	サイ
33	33	55	33	22	12	3	0	33	55	33	11				
カ	コ	メ	チ	ヤ	ル	カ	ラ	ミ	ナ	タ	ベ	ヨ	タ	ベ	テ
22	22	2	0	11	55	66	55	11	22	3	0				
カ	ヘ	ラ	ズ	ニ	ア	チ	ラ	ヤ	コ	チ	ラ	ト	ビ	マ	ハ
55	53	22	21	22	23	1	0								
ワ	タ	シ	モ	イ	ツ	シ	ヨ	ニ	ト	ビ	マ	セ	ウ		

鳩 遊 戯

鳩はとさんよ

巢をいで、おいでなさい

お米をやるから皆たべよ

たべてもすぐにかへらずに

あちらやこちらをとびまはれ

わたしもいつしやうにとびませう

曲終れば元の圓となり鳩は圓のものに止まる此止まられしもの代りて鳩となる(順次くりかへすこと)

(圓を造り鳩は其の中心にかゝむ、圓は拍子、鳩は初めに數人を出しおく、圓は手、鳩は少し擧げ後方に退く鳩は圓の外へで、羽を動かしてとぶ)

(圓は外向きかゝみてお米をやる鳩は兩手にて嘴形をなしてお米を食する様をなす)

(鳩は羽を動かして自由にとびまはる圓は外向きのまい立ちて拍手)

(圓のものも羽を動かして鳩と同様にとぶ)

(圓のものも羽を動かして鳩と同様にとぶ)

(圓のものも羽を動かして鳩と同様にとぶ)

幼稚園教育の科學的研究の前途

——ダビッドソンに據る——

紹介子

茲に幼稚園教育と科學的研究といふ二つの言葉を結びつけた標題を掲げると多數讀者の中には、種々不審を懷かれる方があるであらう。

近代科學といふ言葉を聞くと直ぐにエンヂンや機械工藝や外科手術や統計表を思ひ出す人々は幼稚園教育の科學的研究などといふことを滑稽に感ぜらるゝかも知れない。一寸考へてみても、エンヂンや機械工藝を無邪氣な、たわいのない、一見無意味な兒童に關する事柄と結び付けることは正さに不條理である。科學といふもの、兒童といふものを上述の如く解する限りに於ては、幼稚園教育の科學的研究といふ言葉は何うしても滑稽に感ぜられる。

それから又、他の人々には、この幼稚園教育の

科學的研究といふ言葉は僭越に聞えるかも知れない、精緻周到な用意を以て研究調査に従事して居る科學者は幼稚園の不完全な訓練や確固たる知識の窮乏や獨斷や無批判を見て幼稚園教員の科學的研究といふ言葉は僭越であると思ふに相違ない。

彼等は冷笑しながら言ふであらう、科學者と兒童教化者とを一身に兼ねやうなぞとは却々六ヶ敷い藝當であると。我々は斯ういふ冷評に對して、悲しいことながら、目下のところでは抗議を申込むことが出来ない、たゞ我々には恃むべき未來がある、而して我々は力の盡りその方向にむかつて急ぎ進みつゝあるといふことを言ひ得るのみである。

それから又、或る種の人々には、幼稚園教育の

科學的研究といふ言葉は些の新味をも有せぬ平凡

のである。

無味の言葉と響くかも知れない。さういふ人々は

科學的研究及び幼稚園教育なる二つの言葉の結

とにかく多少科學的研究といふものを嚙つて居て

合は次のやうなことを信ずる人々に取つては大きな、重要な事柄の豫言として聞かれるであらう、

科學者の著書や談論に啓發されてゐると同時に兒童研究の大家の説にも一わたり眼を通して居ると

即ち一般社會の福祉といふものは人類の天稟と能力を十分に開發するといふことゝ緊密な關係を持つといふこと、人間力の開發に於ては孰れの部分でも輕んぜられて關はないといふことはない、

稱するであらう。こんな風に幼稚園教育の科學的研究といふことを既に澤山の人々が心得てゐると

即ち幼稚園に於ても大學に於ても均整的の發達といふことが心掛けられなければならないといふこと

したならば何の必要があつて「幼稚園教育の科學的研究の前途」などといふ長たらしい標題を掲げて

科學といふものゝ効能は科學の力が要せらるる場合にその力を假すといふ點に存するといふこと、

無用の言辭を弄するのであるか？それは今度は我々の方が批評的になつて居るからである。我々は恐らく滑稽な程無智であらう、又それが爲めに

未來に於ては卓拔な科學者が深い慈悲心を持つに至るといふこと、先生や兩親や學校當局者が單に犧牲的精神を有するに止らず、科學者の提出すべき如何なる質問に對しても應じ得るやうになると

獨斷的でもあらう、しかし我々は是等の冷罵に惑はされて我々の實際上の仕事を忽にしてはならない。而して所謂科學的努力が幼稚園教育といふもの

いふこと、斯ういふことを心から信じて疑はぬ人々こそは幼稚園教育の科學的研究といふ言葉の荷

のに加へられた爲めに、日々の義務が如何に分りにくいものとなつたかといふことを一番よく知つてゐるものはその局に當つてゐる我々より外はない

いふこと、斯ういふことを心から信じて疑はぬ人々こそは幼稚園教育の科學的研究といふ言葉の荷

てゐるものはその局に當つてゐる我々より外はない

いふこと、斯ういふことを心から信じて疑はぬ人々こそは幼稚園教育の科學的研究といふ言葉の荷

てゐるものはその局に當つてゐる我々より外はない

いふこと、斯ういふことを心から信じて疑はぬ人々こそは幼稚園教育の科學的研究といふ言葉の荷

つて居る使命を實に重く且つ貴く思ふであらう。
我々の今述べんとして居る幼稚園の科學的研究といふ言葉は斯る意味を持つものなのである。

標題に關する辯護はこの位にして置いて、次ぎに我々は少しく實際的の問題に向つて話を進めて行きたいと思ふ。最近に於て我々は幼稚園の仕事に於て極めて著しい科學的態度を示して居る實例を見ることが出来る。その實例は我々に如何なる教訓を與へつゝあるか？ モンテッソリーは幼稚園教育の科學的研究の可能性に就て如何なることを示したか？ モンテッソリー以前に於ては、モンテッソリー程に近代科學の力に頼り、その實驗に基礎を置き、教育的努力に依つて編み出された諸書をあまねく涉獵したものではなかつた。

モンテッソリーに於て、我々は既にユメーンな完成された科學者の出現を経験し、而してモンテッソリーによつて科學的の智識と方法とが有効的に且つ徹底的に教師や両親に教へられたと思つて

よいであらうか。これに對しては「然り」と「否」との二様の答がなされるのである。

モンテッソリーの研究は成程或る部分は驚くべくサデエスチヴで而して有益である、而かもそれが科學の使命を遺憾なく果たしてゐるとは決して言はれないのである。氣の毒ながらこれ以上にモンテッソリーの辯護の仕様を我々は知らないのである。

科學といふものは、その全き權威を以てする時は、ある目的のための手段や方法とは全然没交渉に、科學は科學として探求されなければならぬ。而して事實と結論とが我々の前に提出される、我々はその内から道理に適つたものを自由に選び取りさへすればよいのである。斯う解釋して來るとモンテッソリーに對して苦情を申込むことは少しくお角違ひになる、モンテッソリーの說法と爭ふ必要もなければ又その實驗に對してとやかういふ必要もないことになる。何故ならば科學者はいつ

も全然確かな結果を發表するものとは決つてゐないからである。

けれども我々はモンテッソリーの貢獻の内に動かし難い眞價の潜んで居ることを決して忘れてはならない。若し我々がモンテッソリーの大體を見ることが避けて、その末節の短のみを挙げやうとするならばそれは甚だ卑しい行爲でなければならぬ、目的及び方向に就いていふならば、我々はモンテッソリーの進んで行つた道を承認するに當かなものではない。モンテッソリーは前行者の凡庸な繼承を以て甘んじてはゐなかつた。モンテッソリーは細心の識別を以て伊太利教育界の無能を感知した、而して現代の教育的人類學及び實驗心理學の應用の限界を明かに指示した。是等は心身の測定に役立つた。恐らく、それは必要な任務であつたからであらう、而かも是等のとは教育の中心問題とはあまり縁のあることではなかつた。モンテッソリーは伊太利教育界の實狀を簡單に纏めて次のやうに述べてゐる。

「人類學も心理學も未だ嘗つて教育の事に向つて盡力したことはない、それと同じやうに科學的に訓練されたと稱せらる教師も未だ嘗つて眞正の科學者の標準にまでは立ち至つてゐない。教育といふものが實際的の進歩を遂げるためには理論と實際とが巧に結合されなければならない、この結合こそは科學者をして重要な教育の分野を見しむると同時に教師達を今日のやうな低い智識の水平線から引き揚げるべきである」

モンテッソリーは更に進んで驚くべき仕方にて、幼兒及び一般社會に對するユニークな興味と科學者の氣分、心持とを巧みに結合させたのである。女史は云ふ――

「科學者とは何であるか？科學者とは機械の巧みなる操縦者を意味するものではない。我々の名けて科學者といふ人々は、實驗といふものを、人生の深き眞理を探求する爲めの又、人生の蠱惑的な秘密からヴェールを掲げ去るための手段であると感ずる者である、而して又、その探求に従事して

ある内に、その心の内に自然の神秘に對して愛の感じを湧き起し、遂には自己を考ふる暇なきまでに情熱的となり得る人々である。

されば教育の分野に働く人々が科學的精神を以て進むことは實に望ましいことであつて、是等の人々が十分よく導かれることが刻下の急務である。換言すれば教育者が自然現象に對して興味を懷き、自然を愛するが爲めに、實驗の用意をと、のへてそこに自然の啓示を待たうとする科學者の熱心の態度、憧憬の態度を學ぶやうになることが望ましいといふのである。」

けれどもこの注意深い憧憬の態度、即ち眞理を眞理として喜ぶといふことだけでは未だ十分ではないとモンテッソーリは説く。我々は常に我々を社會的に將又個人的に向上せしめて行くことを心掛けてゐなければならぬ、それ故科學にも亦この人道的な衝動が當然附加せられてゐなければならぬのである。この二つが結合して始めてモンテッソーリの希求して居るところの理想の「教育的

科學的人道主義者」が現れるのである。尊敬、愛、神聖なる好奇心、努力慾、是等の混合を以て、教育者は小さい子供のすべての表現を看守つてゐなければならぬ。

モンテッソーリが我々に向つて説く所の最高の理想は大體以上の如きものである。我々は之に對して安んじて賛同の意を表すべきである。又この教育説は歴史的にも大いに價值を持つべきものであることを我々は信じて疑はぬのである。

子供を可愛がるといふことはチツとも珍らしいことではない。教育史を繙いて見ると幼兒を熱愛した人の例は澤山ある。しかし古い教育學に缺けてゐる所のものは科學的の用心深さと忍耐強い期待と正しい豫斷とである。古い教育者は澤山の假定を持つてゐて、それを勝手に子供に當兼ねて觀察した、理論や哲學で豫じめ決めて置いた事柄を子供のしぐさから無理に讀み取つて折角の觀察を不正當なものとしてゐたのである。

茲に於て、我々は最早、これから先、幼兒の教

育的研究に適當な科學的な方向や態度を我々に示してくれる人をモンテッソーリ以外に求めなくともよいといふことを安心して承認するのである。この點に關してはモンテッソーリがすべてを我々に用意してゐてくれる。しかしモンテッソーリの偉なる點はこれに止らないのである。

從來の學校といふものゝ概念はモンテッソーリによつて全く新にされた。學校は科學的教師の實驗所といふことになつた。我々は又學校を教師の觀察のための道場としなければならぬ、學校の内に科學的敎育學を生せしめやうといふならば學校は兒童の自由な自然な表現を許さなければならぬ。これが本質的の改革である。教師的科學者の第一の任務は科學者の有すべき周到緻密な態度を以て現象を知らうとすることである。敎育は何よりも先づ診斷的でなければならぬ。現象が理解されたならば、最上の確信を以て、豫じめ結果を豫想することなしに、種々の實驗を行つて見なければならぬ、處方書が効を奏さなくとも誰も咎め

らるべきではない、更に進んで實驗を開始する勇氣と熱心とがなければならぬ。

我々はモンテッソーリと、その自由の説自發的表現の改修に就て争ふ必要はない、モンテッソーリはたゞ自分の説を統一するために斯う言つて居るに過ぎないのである。眞の敎育を行はふとするには、在來の方法習慣を盲目的に蹈襲するのみでは駄目である、何うしても統一のために分析され理解されるべき要素と勢力とを以て實驗を行はなければならぬ。このことは目下の敎育界に於て服膺さるべき第一のことである。

モンテッソーリは以上の如く態度及び方向に於て科學的であるばかりでなく、その取らんとしつつある方法に於ても大いに科學的である。モンテッソーリの實驗は大部分子供と一緒に行はれる。何故ならばモンテッソーリは子供の力を解放しないやうなものや子供の根本的の興味をしつかりと掴んで、それを働かせることの出来ないやうなものやを擯けるからである。(未完)

兒童樂園を訪ふの記

記 者

恐しく暑い日であつた室内の寒暖計が九十三度ばかりだつたから、何でも戸外へ出たら百度以上がものはあつたに違ひない。

市内電車を目黒の終點で棄て、彼は埃が煙のやうに舞ひ揚る權之助坂の方へと向つて行つた。

權之助坂の下り口に、赤いペンキ塗の立札が、路の左側に立てゝあつた、「兒童樂園」と書いてあつて、人差指がその方向を示してゐた。彼は扇をかざしながら、手巾で汗を拭き拭き、坂を下りて行つた。坂は片側往來止めで、工夫が鶴嘴を目に光らせながら道普請をして居る。紺碧の空に白い雲がもく／＼と重なり合つてゐる。

駄馬がせつなさうな顔をして坂を上つて來る、栗色の毛並に沿うて、汗が幾筋もの流れを爲してゐる。片側しか通れない往來を一ぱいに塞げてゐる。

此の荷車の馬をチイツとばかり厄介な奴だと思つた彼は重い荷を牽き惱んで泣きさうになつて居る馬の眼を見ると、忽ち氣の毒になつて了つた、而して「馬も大變だなア」と思つた。……そんなことは何うでもいい——兎に角坂の中途まで來ると、兒童樂園のフラフが見える。青田のそよぎが見えて遠い森が見える。そこで郊外は青々として空氣が清く、誠に結構であるといふことになる。坂を下り切つて了ふと、路の右側に兒童樂園の入口がある。門衛のお爺さんは人の善さうな笑顔を以て彼を迎へてくれた。暑さに閉口して、日向道ひなたみちを自烈じながら歩いて來た彼は門衛のお爺さんの優しい應對振りによつて尠からず慰められた。而して平生の善人的心持に逆戻りしながら兒童樂園の門を潜つた。

兒童樂園の構内は彼の豫想よりもずつと廣かつた。それで彼は樂園を訪ふの記なんてものを書くのは大變だわいと思ひ出した。要領を得たことを書くには觀察眼といふ奴を働かせながら蚤取り眼で歩かなければならない。それがこの溫氣には却々氣配りの要る油斷の出来ない仕事で並大抵のわけのものでない。何は然れ、園内を一まわりしてみるのがあるので、彼はスベリ山の麓を通つて植物園の前へ出た、それから動物の檻の前をいくつか通り過ぎて、小さな土橋を渡つた、土橋の下には睡蓮の花が咲いてゐた、鴛鴦が二羽涼しさうな顔を並べて泳ぎまわつてゐる。この小川の傍に大きな木造の建物がある、これが本館である。本館の後へまわると苗圃や稻田がある、稻田にはお百姓さんがせつせと稻を植ゑつけてゐる。この邊にはシーソーやスベリ臺がある。坊ちやんと嬢ちやんがお父うさんにシーソーの遊び方を教はつてゐる。瘦せた坊ちやんはシーソーが上へゆくとき、

如何にも險呑で仕方がないといふやうな顔をする、お父うさんは側から「ホーラ、面白いだらう」と仰有る、でも坊ちやんは、一向面白さうぢやない。元氣のないこの坊ちやんをこの樂園まで遊ばせに連れて來られたお父うさんのお心持に彼はしみ／＼御同情申上げる。

何しろ暑いので、彼は引き戻して來て、土橋の傍に佇んで夢のやうな睡蓮の花を見て、ホツと息をついてゐた。といきなりキャツ／＼といふ聲がする——御心配あるな、猿が啼いたのである。

猿は小川の近くの檻の中にゐる。かなり廣い檻の中に一人住ひをしてゐる猿はわづかの日蔭を求めて大勢並び横たはつてゐる兎と較べると、正さに別莊住ひの身の上である。

それにこの猿は非常に人氣者である。猿の人氣者である所以はまつたく猿が兎のやうに薄志弱行の徒でなく、山羊のやうに紳士的謙抑を氣取らず、鶏のやうに無定見な勞働を敢てせずに子供と共に

大いに元氣よく遊び戯れるといふ點にある。成程御近所の檻に居る山羊も鶏も兎も皆それ相應に子供に何物かを教ふるには違ひない、しかし子供の友達では決してない。

子供と戯れることの出来る猿は兒童樂園の宥者である。子供の友達になるものは何よりも先づ子供の友達になれる性質を持つ者でなければならぬといふことはあまりに分り切つた話である。この點から行くと山羊や鶏や兎は子供の友達としてはなくもがなといふことになる。山羊は乳を供給すればいい、鶏は卵子を産めばいい、兎はと、一寸これは困るがとにかく何か外のことをした方がいい、その方が山羊的に、鶏的に、兎的に徹底する所以である。といつて山羊や鶏が兒童樂園には無用の長物であるといふのでは更々ない。子供の友達になれぬやうな人は早く子供の友達たることを辭職した方がいいといふことを言ひたさにこんな餘計なことを言つてゐるのである。そこの所をお

間違ないやうに。しかし理窟といふ奴はこれを知ねてゐる方は涼しいが、聞かせられる方の身にとると迷惑千萬なわけで、頗る夏向きでない。世の中に青い理窟がないと餘程結構であらうと存する。彼は自身でこのことに氣が附いてゐるのだからもう屁理窟は言はぬ了簡らしい。讀者諸君は幸ひに御安心あつてよろしいわけである。

さて、話は猿の檻のまわりに子供達が大勢集つてゐるところまで逆行する。猿が廣い檻のなかを自由自在に跳ねまわつてゐると、お母さんと坊ちゃんやんと嬢ちゃんやんがこちらへお出でになる。嬢ちゃんやんは忽ち猿がお氣に召して了つて、檻の前へ立つたまゝ動かない、しかし何うしたものか坊ちゃんやんは猿の傍へ行かうとしない、おまけに「早くむかうへ行きませう」と仰有る。お母さんがよく聞いてみると「猿が恐い」といふ。何時までも猿を見て居たい嬢ちゃんやんは大いに業を煮やして了つて「ほんとにあなた憶病ねえ」ときめつける、今日出

會ふ男の子は皆妙に憶病だわいと彼も思ふ。坊ちやんは「憶病ぢやないけれど猿はひつかくから厭だい」と言ふ。至極御尤な次第である。坊ちやんは男性の尊嚴のために一寸憤慨して見せた。

猿のところで大分停電して了つたが、彼はそれから樂園の北側の運動場へ行つてみた。こゝではぶらんこが子供衆の御意に適つてゐる。軽く涼しさうな洋装をした嬢ちやん方が威勢よく身を飄してぶらんこを漕ぐ。このぶらんこの傍に「このぶらんこは次の圖のやうにして拵へてありますから危険はありません」といふやうなことが書いてある。それを讀むと成程如何にも大丈夫に出来てゐる、これならば甚麼ことがあつても倒れる氣遣ひはあるまいと彼も大きに安心する。

それから彼は砂場の傍へ行つて、腰掛に腰を落して子供達が汽車のトンネルを拵へるのを餘念なく眺めてゐた。砂場の上には葦簾の屋根が張つてあるので、細い日光の線が凸凹になつた砂の上に

縞を刷いてゐる。自活の必要を自覺してゐなかつたならば、大人でも砂場に山を盛り上げたり、海を堀つたりすることは大いに面白いことであるに相違ない。子供の遊びに就てはいろ／＼の學説があらう。しかし彼は遊びは人間の一生を通じて失はれることのない現象であつて、子供の遊びと大人の遊びとの相違は、自活の必要を自覺しないものとしたものとの相違から生じて來てゐると考へるのが一番面倒臭くなくつてよかつた。……ホイしまつた、彼は又斯くの如く無用な考へに囚へられてゐる。

本館の窓からガラン／＼と振鈴の響が漏れて來た。本館階上の講堂でこれから講演が始まるといふ報知である。

彼は講演を聞くべく本館の玄關口の方へ歩を運んだ。而して下駄を草履に穿き替へて螺線狀の階段を上り講堂へと入つて行つた。

階上の講堂はすべての窓が開かれてゐて、風通

しい。應がてドクトル・オブ・フ・ロン・久保良英先生の「幼兒の遊戲」といふ講演が始まる。前回のお話の續きと見えて、今日は四歳頃から六歳頃まで即ち丁度幼稚園時代の幼兒の遊戲に就てお話しがあるといふ。お話の荒筋を次に記してみる。

幼兒の三四歳頃は個人的から社會的に、受動的から發動的に移る過渡期であるから、玩具もこの點に鑑みて選擇されなければならぬ。この頃になると男兒と女兒とはその性の區別によつて、その弄ぶべき玩具に對する嗜好にも相違をあらはして来る、即ち男兒は馬、劍等を好むに反して、女兒は飯事道具や人形を好むやうになる。尤も先年大阪の保育研究會で調査したところによると、男兒は劍よりも電車や汽車を好む者が多かつた、しかし女兒は矢張人形と毬とを一番多く好むといふことが統計の上から知られた。フレーベルの方法は今日では既に古くなつ

て了つたが、幼兒の發動的精神を誘導すべしと言つたフレーベルの言葉は實に千古不磨の卓見である。亞米利加では近頃コロンビア大學教授デュエイ氏の保育法が一般に行はれてゐる。デュエイ氏に依ると、幼兒の遊戲は幼兒をして將來の實際生活に順應せしめるやうに導くものでなければならぬといふのである。茲に水車小屋を作らうとすると、先づ實際の小麥や玉蜀黍の粉を入れる袋を作らせる。水車小屋が川側にあるといふので、床の上に白墨で川を描く、さてこの川を渡るのに橋が無い、それでは一つ橋を作らうといふことになる。そこで幼兒は床板を運んで來て實際に渡れるやうな橋を作るのである。斯くの如き手續を以て遊戲を行へば、幼兒は自己の作業の目的を知る、而してその目的に適應するために、如何なる材料を選び、如何なる作業を爲すべきかを、判斷し且つ實驗することが出来る。それ故幼兒は保姆から、橋とはこ

んなものだ」と注的に話されて、不明瞭な觀念を得るのと異なり、橋なら橋そのものを實際に理解するのである。……(略)……スタンレー・ホールは女兒の人形^{ドール}を愛するのは丁度偶像^{アイドル}を愛するやうなもので、殆んど狂熱的であると言つて居る、doll と idol とは語源的には違つた字であるが、發音の似寄りから斯う言つたのである。

それで日本には三月に雛祭りと言つて、人形のおまつりがあるが、これは子供のために甚だよい習慣である。人形を飾つたり、種々の供物をしたり、互ひに友達を招き合つたりするのは將來に對する準備を遊戲の内に爲すのであつて教育的にも非常に價值のある行事であるとホールは述べてゐる。

乍併、幼兒の遊戲といふものは、之を一面から觀察すると、種族發生の順序を個體の發生に於て繰返すのであると見ることも出来るのであるから、幼兒の遊戲は實際的價值を豫想したもの

でなければならぬとばかりも言へないのである。幼兒期の或る時期に於て、蝶を追ひ、蜻蛉を捕へるやうな遊戲が行はれるのは自然であり、あながち之を禁止する必要はないのである。

……(略)……田舎の幼兒と都會の幼兒とはその把持してゐる觀念の内容に於て著しき相違がある。それ故この相違を彼是融通して相等しきものとするためには玩具に依るのが一番よろしいと思ふ。即ち田舎の幼兒には電車飛行機等の玩具を與へ、都會の幼兒には自然物の玩具を與へるために時々郊外へ伴うて行き自然に親しませる必要がある。幼兒には十分の日光を與へて、出来るだけ自然と親しませなければならぬ。ホールは「自然と一緒にいる子供は光榮である、子供と一緒にいる教育者は光榮である」と言つてゐる。

久保先生のお話は全體これで終るのであるが、いろいろ統計表や何かをお示しになつて、非常に

有益な、綿密な御講演であつた。久保先生の次ぎには兒童致養研究所理事の成澤金兵衛先生が演壇に立たれた。講演の主題は「米國生れの日本兒童」である。成澤先生は米國に於ける日本人の狀態を具さに説かれて、移民問題や土地所有權問題や學堂問題やに就て話を進められた。彼は先生が二重國籍問題を語られる時殊に多くの興味を以て聞いた。北米合衆國の法律では北米合衆國の國土内に於て産まれたものを米國人と稱して、之に市民權を與へることになつてゐる。然るに日本の法律は日本人の産んだ子を日本人と稱することになつてゐる。それで亞米利加に於て將來發展して行くためには日本人は何うしても米國の市民權を獲得して置く方が非常に便利である。市民權を得るといふことは即ち米國民となるといふことである、然るに日本人の子供は日本政府に對しても日本人としての届出をしなければならぬ。そこで國籍が二重となる、而してこの二重國籍といふことは排

日に傾いてゐる米國人等に日本人に市民權を與へることを拒むいゝ口實を與へることになる。現在に於て米國で生れた日本人の子供が市民たる資格を得る年齢に達してゐるのは尠い。それ故自然米國に於て未だ日本人の二重國籍といふことが喧しい問題となつてはゐないが、軀がてこれは大問題となるに違ひない、故に日本に於ては今の内に大いにこの問題を研究して置く必要があるといふのである。成澤先生のお話は大いに實際的のお話で國家對個人の根本問題から渦巻となつて湧き上つて來る一種の具體問題であつて彼の興味は深くその方へ惹かれたのであつた。

成澤先生の講演が終ると、醫學博士近藤乾郎先生の「兒童の肺結核」といふ講演があつた。先生は一般に肺病といふものに就て傳染系統、各期の症候豫防法、消毒法、治療心得等を話され、間々兒童の肺結核に觸れて行かれた。非常に分り易い有益な講演であつた。肺病患者の部屋はフォルマリ

ン瓦斯で消毒すること、肺病患者の咯痰は二十倍

の石炭酸（石炭酸五、水九十五の割合）を入れた痰壺にさせること、それでも微菌は一晝夜位は生きて居ること、石炭酸や何かの用意がなかつた場合には患者の痰は便所の中へ棄てるのが一番いゝこと（他種の有勢な微菌のために肺病の微菌は亡ぼされて了ふ）。患者の用ゐた器具類は煮沸すれば微菌は全部死滅して了ふこと、衣類や何かはこの頃の炎天なら裏表をかへして一日強い日光に當てたならば大抵微菌は死ぬこと、すべて肺病の微菌は熱に對しては弱いけれども寒冷に對しては、かなり強く、雪の中に埋めて置いても容易に死なないこと、肺病は初期ならば必ず全治し得るもの故癒る事をよく確信して根氣強く治療を続けねばならぬこと、第一期肺炎加答兒の時分には無暗に藥物によつて熱を下げやうとしても無駄であること、なるべく日當りのいゝ窓際か何かに横つて居ると熱は自然低下して行つて病氣も癒ること、斯ういふ

注意を近藤博士は澤山述べられた。

素人を相手に極めて通俗に話されるところに博士の用意が偲ばれて床しい。獨逸語や拉丁語で氣を遠くさせられることゝ思つてゐた彼は博士の碎けた分り易いお話を非常に有難いものと聞いたのであつた。

講演が済んで了ふと博士を取巻いて種々の質問をされる婦人が多かつた、これを以て見ても博士の講演が一人よがりの講演でなく、慥かに手答へのある講演であつたことが分る。

講演會が終つてから、講堂へ通ふ廊下で成澤先生にお目にかゝつて來意を申し述べると先生はいろ／＼園の景況に就てお話し下さつた。樂園へは毎日四五百人の兒童が遊びに來るが多い時には七百人位になることもあるといふこと、日本橋や淺草邊からはる／＼と通つて來る兒童もあるといふこと、園内が廣いので二三十人も來たかなと思つて調べてみると實際は百人近くも來てゐるといふ

こと、雨の降る日でも百人位來て本館の前で遊ぶ
でゐるといふこと、それ故雨降の時大勢の兒童の
遊ぶことの出来るやうな廣い建物を建てる筈にな
つてゐるといふこと、小學校の生徒が教師に引率
されて遊びに来るが日曜日だと一般の兒童が澤山
遊びに来てゐるために、お關ひすることが出来な
い、日曜日以外の日だとお湯や何かを沸かして上
げることが出来るといふことなどを彼は伺つた。

彼は成澤先生と御一緒に、もう一度樂園を一巡
してゐることになる。「樹を植ゑる時期を失ひまし
たので日蔭が尠くて困ります。それで止むなく、
あんな風に葎簾張りの日蔭が拵へてあります。秋
になったら街路樹を澤山植ゑつけることになつて
ゐます」と成澤先生は語られる。本館の前から植
物園の方へ行く。こゝには松杉檜等の建築用材を
始め、鉛筆の木やマツチの軸の木とか其外實用に
適する樹木、花卉の類が栽培してある。この植物
園のすぐ前にセメントで固めた大きな池が二つあ

る。地球池と稱するものである。直徑五間大の二
つの地球池は東半球と西半球とであつて、海水に
擬して水を湛え（但しこの日は掃除した後とあつ
て水は乾してあつた）日本を中心とした世界の陸
面を現はしてある、つまり陸地の部分がセメント
で盛り上げてあつて、水面より上に出て居るので
ある。而してこの陸地にはペンキで各國の領土が
塗り分けてある。この東西兩半球を一眼に見下ろ
す位置に富士山の形を模した芝生のスベリ山が隆
起してゐる、富士山の頂上から、兩半球を睥睨し
ながら、迂り下りるなどは大いに痛快で、幼兒を
して不知不識の間に豁達な氣宇を養はしむること
になるのであるといふ。スベリ山をぐるりとまわ
ると、柿や李や桃や蜜柑やを植ゑた植物園があ
る。この植物園と直角をなす一線にはずつと小動
物の飼養場がつゞく。最初に書いた如く、猿や鶏
や兎やモルモットや山羊があるのである。是等の
動物の檻の前には一錢づゝの餌が並べてある、木

の函の中に一錢銅貨を落し入れて、人參の餌を兎に與へてゐる嬢ちやんもあつた。土橋の傍の圓形の檻の中にゐる猿は成澤先生のお話に依ると、南洋の産ださうで非常に人なつく、爪を持たないから少しも危険のない愉快な友達であるさうな、人が居ないと寂しがるといふから可愛いでないか、夕方になつて檻を出してやると犬と相撲なぞを取つて却々愛嬌があるといふ。南洋の猿の傍の檻には龜が一匹悟り濟して一寸も動かないでゐる。

本館の裏へ出て苗田の方へ行く、こゝはその内に養魚池にして舟を浮べることも出来るやうにするのであるさうな。本館の北側にある運動場には芝生や砂場があり、ぶらんこ、すべり臺、鐵棒、吊かん等の運動器具が備へてある。成澤先生のお話によると、ぶらんこが一番繁盛し、その次ぎにスベリ臺が最もよく繁盛するといふことであつた。

斯んなことでこの長たらしい記事を終りたいと思ふ。暑い中をあちこちと親切に御案内下さつた成澤先生に感謝の意を表して筆を擱く。(終)

風の夜

月も照らさず星もない
風のはげしい夜々を
よどほしお馬で人が行く、
夜のくらさに濕ほさに。
燈りも消えた眞夜中に
なぜにお馬で駈けて行く。
樹が大聲で泣きさけび
お舟の揉まれる夜々を
足音たかく又ひくく
疾風のやうに馬で行く、
あちらへ駈けて行つちまふ——
とまた、こちらへ駈けて来る。

の一本日 年幼本日

□倉橋惣三先生監修

本誌は、三歳から拾歳までの子供の爲め美しい繪と、面白い噺とを、教育的に組み合せた他に比類なき繪雑誌です。殊に毎號教育的な手技附録を添へます。

本誌は 玩具とお噺しとの興味及び教育的價値を兼ねあはせたるもの、子供には何よりも喜ばれ、何よりもよき友達となる。

定價

壹冊拾二錢 □半年 郵税共七拾五錢
郵税壹錢 □壹年 同壹圓四拾四錢

御大典記念畫報 婦人畫報
皇族畫報 少女畫報
日本幼年

發行所

東京橋鍛冶橋外
振替東京四九〇〇

東京社

顧問 高島平三郎先生

コドモ

本誌の四大特色

子供繪雑誌は玩具であると同時に教科書であります。お子様方がコドモを御覧になつてゐる間に物事を覚えお行儀がよくなること不思議な位です。

まじめで教育的なこと
繪が叮嚀で美麗なこと
お話が易しく面白いこと
片假名のみで讀易いこと

東京市小石川區
林町五十七

コドモ社

電話番町六、一八
振替東京二七九六三

合本出来

大正三年七月號より
同四年十二月號まで
大正四年一月號より
同四年六月號まで
大正四年七月號より
同四年十二月號まで
大正五年一月號より
同五年六月號まで

□ 定價 一冊 十二錢
□ 郵 税 五 厘
□ 六冊郵税共六十九錢
□ 十二冊 一圓三十一錢
□ 郵税共
□ 總て前金の事
合本定價
各集郵税共五十錢